

『閉ざされた部屋と開かれた扉』 (*Locked Rooms and Open Doors*) 1933年～1935年
アン・モロウ・リンドバーグの日記と手紙》より 序文

翻訳 平野 亮

「旅人は尊敬に値する。彼は何処から何処へと向かう。それは我々一人一人の歴史である。」 (ソロー『日記』、1851年7月2日)

この本は、大西洋航路調査飛行という長旅で始まっている。この旅の中で私の夫は、大西洋の地勢や天候状況、1933年当時にはまだ開かれていなかったアメリカ・ヨーロッパ間航路における着陸可能な地について調査を行なった。1935年12月に新たな国で新しい生活を始めるために3歳になる息子を連れてイギリスに向かう船旅で、本書は終わっている。しかし、このふたつの旅は、ソローの「何処から何処へと向かう」という意味ではひとつの同じ旅であった。

私たちは、「何処から」旅立ったのだろうか。『アン・モロウ・リンドバーグの日記と手紙』の前2巻を読まれていない読者の方々のために、ここでその概略を述べる必要があると思う。私は、強い絆で結ばれた愛情深い家庭の中で世間の荒波から守られて育った。第1巻の『ユニコーンを私に』 (*Bring Me a Unicorn*) の中で私はひどく内気だった思春期を過ごした後、ニールソン学長のスミス大学で私の交友関係は広がり、また書くことへの興味を見出した。その後、私たち家族にとっては初めてのメキシコという魅力的な地で、劇的な展開を見せる。父ドゥワイト・モローが1927年にメキシコ大使として赴任し、クリスマスにメキシコを訪れていた「時の英雄」チャールズ・リンドバーグと出会い、彼と私は恋に落ち、予想もしていなかったことに1929年、私たちは結婚することになる。

第2巻の『輝く時、失意の時』 (*Hour of Gold, Hour of Lead*) では、黎明期にあった航空という新しいさらに大きな世界に私は突如として放り込まれる。当時は有視界飛行の時代で、計器飛行を行なうだけの十分な装備のない単発機で低空飛行することが多かった。長距

離航空としては、大陸間航路の開拓や南アメリカ、カリブ海への調査飛行も行なった。

技術的な能力も訓練も受けたことのなかった読書好きな女子学生だった私は、飛行機を操縦し、無線機を使うことを覚えた。その後、私たちの初めての子ども、チャールズ・A・リンドバーグ・ジュニアの出産に十分に間に合うように、ニュージャージー州ホープウェル近くに土地を買うために、私たちは地上での生活に戻った。この土地に家を建てる計画であり、その家ができるまでの短期間、プリンストンからあまり離れていないローズデールの農場で最初の小さな家を借りた。しかし、これらの出来事も私たち夫婦の遠征飛行を長く妨げるものではなかった。第2巻『輝く時、失意の時』の前半部は、1931年にカナダ、アラスカ、日本、中国へ飛行した『翼よ、北に』(*North to The Orient*)の調査飛行で終わっている。中国で私の家族の初めての死となる父の死の報せを受け、私たち二人はすぐに船と飛行機でニュージャージー州エングルウッドの母の家に戻ったのだった。

その冬、私たちはホープウェルの新築の家に入居した。その数ヶ月後の3月1日、私たちの子が誘拐され、家族の生活は壊されてしまう。不安な日々と犯人との交渉のうちに過ぎた数週間後、私たちの家からそう遠く離れていない所で息子の遺体が発見されるという結末を迎える。これが、第2巻の後半部で私の日記に綴られている「失意の時」である。私たちは自身の身の安全のため、また記者や野次馬の人々からの重圧から生活を守るために、私たちはエングルウッドの母の家、ネクストデイ・ヒルに戻った。そこで、二人目の息子であるジョンの出産を待った。ジョンは1932年8月16日に誕生した。ジョンの誕生と、姉のエリザベスがイギリスのウェールズのオーブリー・モーガンと結婚したことで家族に幸せが戻る。第2巻は、1934年12月に行なわれたエリザベスの結婚式についての記述で終わっている。

この第3巻が始まる時点で私たちはこのような状況にあった。私たちは母のネクストデイ・ヒルの家に住み、姉は結婚したばかりで、妹のコンスタンスと弟のドゥワイトは大学に通っていて家にはいなかった。

私たちがどこから出発しようとしていたかを説明する方が、私たち家族がどこへ向かお

うとしていたかを説明するよりも簡単である。ソローの言葉にあるように、私たちは「何処から何処へと」向かっていたのである。「何処へ」向かっていたのであろうか。それは、探していた新しい生活へとである。1933年から1935年の期間は、ふたつの生活の間の移行期であった。これは、前の生活の崩壊からの回復と、新しい生活を見つけようとする試みの話である。

新しい生活をはじめの前に、以前からの生活の問題を解決する必要があった。私たちの身の安全の問題や報道やプライバシーの問題も解決しなければならなかった。報道陣は引き続き私たちの生活を圧迫し、過剰な報道の結果として送られてくる脅迫状も絶えなかった。息子の安全を守るために武装した警備員を常駐する必要があった。そしてあの事件から立ち直る必要もあった。事件の恐怖はまだ解消されず、事件の謎も解明されないままだった。ホープウェルの家をどうするかという問題もあった。あそこで再び住むことは可能なのだろうか。可能でなければ、母の家を出た後はどこへ行けばよいのだろうか。

ネクストデイ・ヒルの家は、私が育ったパリセード通りの下見板を張った、簡素で不規則に広がっていた家とは違った。私が結婚するまで住んでいたパリセード通りの家は、1928年にエングルウッド郊外の傾斜のある森の中に建てられたジョージア王朝風建築の大邸宅に取って代わられた。母の長年の夢であったこの新しい家は、幕が落とされようとしていたアメリカの繁栄の時代にロングアイランド島に建てられた大邸宅を思い起こさせるもので、在メキシコ大使となりニュージャージー州を代表して上院議員に出馬しようとしていた父の生涯で絶頂の時に建てられた。母は、父の政界入りを期待しながらその準備を進めていた。母が想像していた政界入り後の生活は、広々とした廊下、大広間、食堂、メキシコから帰国後に加えられた図書室とその上に事務室を配置した新しい翼棟、邸宅を管理するために必要なスタッフのための翼棟に反映されていた。残念ながら、父は自分のために設計されたこの家にわずか3年しか住まなかった。父が急死してその生涯を閉じると、このような大邸宅の必要はなくなったが、その後20年以上にわたって母とその数多くの家族と、友人のために使われ続けた。(現在、ネクストデイ・ヒルの家はザ・エリザベス・モロウ学校として

使われている。)

すでに大人になっていて、時折この家で過ごした私の姉・弟・妹たちにとっては、大恐慌、フランクリン・ルーズベルト大統領のニューディール政策、社会主義といった当時の雰囲気の中では、この家は時代錯誤に思えた。制服を着た運転手つきのリムジンでニューヨークに行く時などは、車に投げつけられたレンガのかたまりが自動車の窓を突き破って今にも車内に入って来はしないかと、大袈裟にもフラシ天の膝掛けの下で怯えていたのを覚えている。

母にとっては大勢の秘書やスタッフを抱えることは負担ではあったであろうが、彼女の生活にぽっかりとあいた空白を埋める一助でもあった。ネクストデイ・ヒルの廊下は、家族や招待客、社交界の催し、慈善事業の会合などの往来で賑やかであった。私の夫は質素な生活を好み、1927年から1928年の体験で大勢の人々には辟易していたので気障りな状況であった。一度はその社交界の雰囲気から解放されていた私にとっても、その雰囲気に適応するのは困難であった。しかし、あの誘拐事件からイギリスへの出発までの移行期にあった私たちと息子にとって、この家は安全な場所を提供してくれた。新しい家を見つけるまで、この郊外の家では安全とプライバシーを確保することができたのである。

幸いなことに1933年にそれまでの生活を再開させようとしていた私たち二人にとって、いくつかの確かな手掛かりがあった。何よりも5ヶ月になる赤ん坊が健やかに成長していた。活発で私たちにもよく反応するジョンは、現在の生活を満たし、将来への展望を開かせてくれたし、書き上げていない原稿もあった。私は2年前の遠征飛行の物語である『翼よ、北へ』(*North to The Orient*)の執筆を再開した。ロックフェラー研究所でのアレキシス・カレル博士と夫の生物学的研究も日増しに興味深いものとなっていた。また、新たな航路の開拓、特に大洋航路の開拓という課題もあった。1933年の夏には、私たちは大西洋の調査飛行に出ている。(カレル博士は、1912年にノーベル生理・医学賞を受賞したフランスの外科医・生物学者。)

夫にとって大西洋調査飛行に出ることはごく自然な決断であった。1927年のパリへの飛

行以来、大陸間航路の開拓は夫の関心事であった。大陸間の航路、天候状況、地勢を調査するのに夫はまさに適任であった。飛ぶことは私たちの生活の一部であり、この調査飛行は犯罪の名残から私たちを解放してくれた。また、私たちに関する報道を、飛行機旅行の進歩という建設的な目的に向けることもできた。夫にとって冒険や探検は永遠に変わることはない魅力を持っていた。私にとってこの旅は、当時見出せた「私たち自身の生活」にもっとも近いものであり、自由、夫とのプライバシー、自然の中で生きる人々との接触があった。さらに、無線通信機の操作員と副操縦士として遠征飛行という実用的な仕事に携わる充実感があった。私はこの調査旅行で自分の役割を果たし、その功績に貢献することができた。また、旅が教えてくれることでもあるが、特に自力で進んでゆくこの旅を通して「今を生きる」大切さを学ぶことができた。

これらの事柄は、私たちを立ち直らせるのに役に立った一方で、この旅が 5 ヶ月半に延長されたため、私の生活の中でもっとも癒しとなり、精神的な栄養源にもなっていた自分たちの子と会うことができなかった。また、静かに悲嘆と向き合うという必要な内的なプロセスに、時間を掛けることもできなかった。そして、再開したばかりの執筆活動も再び中断せざるを得なかった。

今から振り返ると、当時の航空の日常業務は肉体的にも精神的にも非常に厳しいものであった。緊急時には後部コックピットの中で恐怖と隣り合わせになりながらも、注意力を長時間持続させながら飛行を続けなければならないこの仕事は、ほとんどの男性にとってもきついものであったはずである。夫と結婚したばかりの私は自分が使い走りのような役割を果たすのだろうと非現実的に考えていたが、実際には非常に骨の折れる調査任務の乗務員の一人であった。そして、この調査飛行は、すべての調査飛行の中でもっともよく準備され遂行された調査飛行のひとつであった。

私のフェミニストの部分では、この仕事を遣り抜いて私でも男性の仕事ができるということを実証したいと強く望んでいた。その意味でも、私は無線通信機の操作で大きな成果を収めることができた。この調査飛行の成功によって私の仕事は不可欠であり、私は南大西洋

における航空機と地上局との間の最長距離通信の記録を打ち立てた。大量の空電の中、150ワードの通信文を暗号で私に送信したパンアメリカン航空の無線通信士が、「驚いた。彼女は受信したよ！」と声を上げた時、私はそれを可笑しいと感じたのと同時に、非常に誇り高く思えた。

新しい職業に適応する代償として、自分の自然な反応を一時的に抑制する必要があった。そのための時間も場所もなかったからである。私はコックピットの中に頭を下げ、無線機のキーを押しながら、すさまじい音に妨害されながらも無線機から流れる暗号をイヤホーンで聞き取っていた。海や空、山脈の美しさを眺めたり、私たちが失った子どものことや家に置いてきた赤ん坊のことを考えたりする時間はほとんどなかった。（「彼はいる。隠れた宝物」と私は書いた。）飛行や地上業務の合間に書かれた私の日記は、簡略な通信記録と化していた。無線機を使う必要のない時、コックピットから頭を上げてグリーンランドのきらきらと光る山頂や北極海のまばゆい冰山、岩場だらけの海岸の上の華やかなエスキモーの村落を見ることができた。時折、夢の中で記憶が鮮やかに呼び覚まされた時や夜に吹きすさぶ風の音を聞く時、縮れ毛の子どもを見かけた時、過去の出来事と折り合いをつけようとする精神的な活動が苦痛とともに促されることもあった。

けれども、全体的にグリーンランドで過ごした時間は北海に飛び込むように爽快であった。岩場だらけの荒涼たる海岸の美しさ、デンマークの移民や探検家たちの温かさ、鮮やかな色のフードと長靴を身に着けたエスキモー人の心の温かい親しみやすさは、私たちの記憶を拭い去ってくれた。この北極圏の小さな孤立した居留地で、私たちは有名人であることの重荷を下ろすことができた。私たちは訪問客であったけれども、人類から切り離された著名人ではなかった。北極の居留地での日常の生活は私たちの存在に関わらず継続し、その様子を眺めその生活のリズムを共有することを楽しんだ。

けれども、グリーンランドを後にしてから数ヶ月の長い飛行を続け、アイスランド、デンマーク、スウェーデン、フィンランド、ロシア、ノルウェー、イギリス、アイルランド、スコットランド、フランス、スイス、スペイン、ポルトガル、アフリカ、南アメリカに立て続

けに立ち寄っていると、旅の現実味が失われ、旅はいくぶん無味乾燥なものになってしまった。ヨーロッパの大都市では報道陣や多くの人々が詰め掛け、私たちのプライバシーは消滅した。新たな土地の印象を吸収する力が次第に低下し、息子のいる家に早く帰りたいという気持ちが次第に強くなっていった。ウェールズにいる結婚したばかりの姉への待ちに待った訪問の時にだけ、現実の感覚を取り戻すことができた。

ガンビア共和国のバサーストからブラジルのナタールまでの非常に忍耐力を要する南大西洋横断飛行の後、私たちは 1933 年のクリスマス前にやっとアメリカに帰国することができた。姉のエリザベスがカルフォルニア州のパサデナの家に入居するのを母が手伝いに行っていたため、夫婦二人だけでネクストデイ・ヒルの家に入った。

帰国すると環境に再び適応しなければならないということはもちろんあったが、私は愛嬌のある息子の母親として再び熱中し、すぐに家族の家を探し始めた。私たちはプライバシーと身の安全を守るという条件をとりあえず満たすことができると判断して、ニューヨーク市内の共同住宅を借りた。この新たな都市の拠点で 1934 年は幸先よく始まった。毎朝、私は息子と 2 匹の犬を綱につないで近所の保育園まで歩いて送った。この年の初めの数ヶ月は『翼よ、北へ』の執筆と、『ナショナル・ジオグラフィック』誌に今回の北大西洋の飛行について長い記事を書いていたため、日記を書くことは少なかった。本と雑誌の執筆以外に書く時間があった時には、姉と妹に手紙を書いていた。

姉のエリザベスに宛てた手紙を見ると、思春期の頃の競争心と嫉妬心が忘れ去られ、新たな親密さが生まれていたことが分かる。私たちはお互いに結婚した身であり、同等の立場でお付き合いすることができた。父の伝記を書く作家を探す原動力になったのもエリザベスで、この話を持ちかけられたハロルド・ニコルソンはこの仕事を引き受けることに同意していた。そして、取材のために次の冬をネクストデイ・ヒルの家で過ごす計画であった。エリザベスは私たちの子供時代の思い出を書き記していた。これは、ニコルソンに家庭の雰囲気について知ってもらうためでもあったが、それ以上に正式な伝記には載らないだろうと考えられた子供時代の思い出を残すためであった。

冬は駆け足で過ぎてゆき、私たちは週末をエングルウッドで過ごした。そして、夏にはメイン州のノースヘイヴンにある母の家に行った。9月には、私たちのために造られた新しい飛行機を取りにセントルイスまで飛んでから、さらに西海岸まで行きエリザベスとオーブリー・モーガン夫婦を訪れた。3日間の牧歌的な日々を過ごした後、ニュージャージー州警視監のノーマン・シュワルツコフから長距離電話で誘拐事件が解決し、犯人を逮捕したとの連絡が夫にあったため、この滞在は急遽中断された。

私たちはすぐに東海岸に飛び、母とともにネクストデイ・ヒルの家に入り、冬にニュージャージー州のフレミングトンで開かれる裁判の準備を始めた。

この新たな展開で私たちの生活は俄かに変化した。誘拐事件の時に私たちを取り囲んだ報道陣の陰鬱で強烈な圧力が、さらにその力を増して私たちを取り囲んだ。新聞は、誘拐事件と毎日展開される訴訟について事細かに報道した。家の車道の入口には再び記者が群がった。報道が増えると、決まったように私たちに送られてくる脅迫状の数も増えた。脅迫状は犯罪的なものもあったが、そのほとんどは新聞の見出しに刺激された精神的に不安定な人々から送られて来るものであった。武装した警備員が敷地内を巡回して息子の安全を日夜守った。裁判で使われる証拠品や証言を事細かに追っていた夫は、警察、弁護士、訴訟を準備していた顧問などとの長い会議に再び没頭した。

私たち自身の生活を取り戻すための努力（遠征飛行）や家を見つけるための努力（ニューヨークの住宅）は、一時的に保留にしなければならなかった。プライバシーと身の安全が裁判とともに脅かされるようになると、子どもと私たち自身のために母の家の保護が必要であった。母はこの上ない度量の広さと理解力、忍耐強さで私たちを迎え入れてくれた。ネクストデイ・ヒルの大きな家の翼棟を私たちにあてがい、夫のプライバシーと自主性を細心の注意を払って尊重してくれた。しかし、娘としての私は必然的に母の活動に引きつけられ、母と夫への義理のどちらを選ぶべきかで悩んだ。

結婚した娘が実家で再び暮らすようになると、奇妙にも自分では気づかないうちに退行が進むようである。母と娘にそのつもりはないのだけれども、結婚以前の母娘の関係が支配

するようになってしまう。私たちは否応なしにそのぬかるみにはまり、すでに卒業したはずの役柄を演じてしまう。母が関心を持っていたことは私とは異なり、不幸な出来事への対処の仕方も正反対であった。母の場合は気高く、様々な活動に熱中することで対処したので、ネクストデイ・ヒルの家は、様々な人々や企画で渦巻いていた。

ハロルド・ニコルソンがイギリスから到着し、父の伝記を書くための取材を開始した。友人、親戚、同僚がひっきりなしにネクストデイ・ヒルの家を訪れてハロルド・ニコルソンの取材を受けていたが、おそらく多くの伝記作家の取材で見られるように、取材を受けていた人々はハロルド・ニコルソンがどのように父の伝記を書けばよいのかということについて必要でもないアドバイスを与えていたのではないであろうか。

ネクストデイ・ヒルの家の雰囲気は、若者たちが生活したり、新たに生活を始めたりすることのできるものではなかった。1934年から1935年の冬に起きた主な出来事はすべて過去に関わることであった。私たちの家族のもうひとつの早すぎた死、伝記のために自分たちの注意を過去に向ける必要性、3年前におきた事件を再現したフレミングトンでの裁判、そして私にとっては母の家での思春期の自分への退行状態。

今日でも、当時置かれていた状況にどのような解決策があったのか私には見当がつかない。裁判があったため、私たちは裁判地の近くにいる必要があった。次女として、また実家にいる唯一の子どもとして、この困難な時期に母を支え、父の伝記に関して生じる厄介な問題については母を支持したかった。また、小さな息子の存在が、母にとってほとんど唯一の暗影のない喜びをもたらしていたことを私は知っていた。私たちが母の家を拠点として度々飛行旅行に出ていたため、祖母と孫の間には親密な絆ができていた。私が母に与えられる本当の慰めは、私たちの息子の存在であると私は感じていた。

『輝く時、失意の時』の1932年〔9月27日〕の日記の中で、私は将来を予言するかのように、「勇気がいるのは、打撃を受けた瞬間ではなく、正気と信頼と安心感に戻るための長い坂を登る時である」と書いた。私にとって、1935年はまさに「長い坂を登る」時であった。新たな悲しみを受け入れるためにひとりになれることはほとんどなかった。母と夫に

は、悲しみを表に出さないというストイックな伝統が根強く残っていた。私は夜ひとりで誰にも聞こえないように泣いたり、敷地の垣根を越えた所にある低木の林の中で切り株の上に座って泣いたりした。自然な感情を押し殺すと、過度の精神的な緊張やゆがんだ恐怖心が生じ、神経が過敏になった。私は思春期時代の自分に退行し、憤懣、絶望、自意識過剰、神経質など、とうの昔に自分の中から追い出してしまっていたと思っていた感情が再び自分の中で沸き起こるのを感じた。罪についてピューリタンのような厳格な考えを持っていた私は反抗的になる感情を必死に押し殺したが、そのような感情は夜になると巨大なキノコのように膨れ上がるだけであった。母や母を取り巻く環境、または自分の置かれた状況を恨む自分を許せなかった私は、その不快感を自分に向けた。自分がまったくの失敗作であり、希望のない状況から抜け出せないでいるように感じた。もちろん、このような精神的な不安や動揺を表に出すことはなかった。私の表向きの顔と絶望の淵とを結ぶための表現の手段が私にはなかった。夜、眠れないまま横になっていると、ソローの「たいていの人間は絶望を内に秘めて暮らしている」(ヘンリー・D・ソロー、酒本雅之・訳『ウォールデン』、筑摩書房、2000年)という言葉の意味を理解し始めていた。

私の反応は、今日の精神力学においてはごく普通の反応であったが、そのような知識も第三者の助けもなく、この状況に初めて直面する私にとってはうまく理解できるものではなかった。私はいささか遅い段階で、自分の尊敬する親が完璧ではないこと、または少なくとも自分の考え方や価値観、好みなどが親のそれとは違うということによりやく気づくという、成長する過程の中で痛みを伴う通過点に到達したのであった。痛みが生じるのはそのことに気づくことにあるというよりも、それを実現してゆくところにある。つまり、自分の愛する人を傷つけずに、また自分が不義理や罪悪感に悩まされることなく、どのように古い自分のパターンから脱却できるかが問題であった。

40年の洞察力を持ってあの頃を振り返ると、ともに生活したあの時期は母にとっても同じように難しい時期であったと思う。母の活動に参加することに否定的であった私が、いかに母を戸惑わせたことであろうか。私が参加することのできたはずの社会活動、慈善事業、

政治活動を拒否したのは、母にとっていかに不可解であったことか。母にとっては素晴らしい機会と思われたものを、私は拒否していた。様々な活動への招待、公の場で話す機会、委員会で委員を務める機会、政治活動に参加する機会、さらには母から見ればごく普通の社交生活に参加することさえも私は受け入れなかった。母はおそらく戸惑い、私に失望することもあったはずだが、母とは違う道を歩むためにそれらの活動への参加を私が拒否することを一度たりとも非難することはなかった。

今から考えると不思議な気もするが、私が抱えている問題について医者には掛かろうという考えは私に浮かばなかった。当時、少なくとも私たちの家庭では、医者には掛かるのは体の病気がある時だけで、私は睡眠不足ではあったけれども体の異常はなかった。精神医学は神経衰弱になった人のものであり、私は神経衰弱にはなっていなかった。精神科医、聖職者、友人などから少しだけのカウンセリングを受けることができていたら、自分が考えていたのは反対に、私の感情の大部分は正常で、取り巻く環境が異常であったことに気づいていたであろう。家族にあった不幸を悲しむのは正常であったし、母から離れて自分自身の家を持ちたいと思うのも正常であったし、自分の才能を表現したいと思うのも正常であった。反対に、犯罪を再現する状況は異常であり、3年という短い時間に二人もの家族を失うことは異常であり、夫と息子のいる女が母の家で生活することも異常であった。

たとえ私が精神科医に掛かりたいと思ったとしても、自由に物事を話せる精神科医はいなかった。また、当時はまだ女性誌、PTA、新聞の恋愛相談の欄などに近代心理学が入る前の時代であった。例えばリルケの『若き詩人への手紙』から「あなたの心の中の未解決のものすべてに対して忍耐を持たれることを。そうして問自身を例えば閉ざされた部屋のよう、或いは非常に未知な言語で書かれた書物のように愛されることを」（リルケ、高安国世・訳『若き詩人への手紙』、新潮文庫、1953年）など、私は本の中に知恵を見出そうとした。私はボードレールの「すべての人に不満であり、また僕自身にも不満である」（ボードレール、福永武彦・訳『パリの憂愁』『世界名詩集大成、フランス II』、平凡社、1962年）の祈りを繰り返して唱えた。「自由とは、私たちが生きている状況の中で偶然に見出したり、

そのような状況を調整したりすることによって見出すのではなく、その状況をすすんで受け入れることによってのみ見出すものである」という小説の登場人物に与えられた助言を書き写した。

もちろん、その中でも喜びを感じられる瞬間は数多くあった。幸福にとって安心感は不可欠であるが、喜びは絶望の淵にあっても花のように開くものである。息子とのふれあいは、息子の認知能力と語彙が拡大してゆく中で時としては言葉を通して、また時としては散歩の途中やゲームなどを通して私をいつも元気づけ、「今を生きる」という飛行が教えてくれた教訓をさらに印象づけてくれた。絶えず変化する自然の姿も、常に私の気分を爽快にしてくれた。私は観察ゲームを作り、そのゲームを通して自分の中の暗闇から自分を解放して外の風景に注意を向けた。このゲームでは、「私は何が好きだろうか」と自問してから、自分の周りで気づいていなかった喜びのリストを作った。私はネクストデイ・ヒルの家の落葉したブナの木の下を歩きながら、木の枝を通り抜けてその上に広がる青空に行けることを祈った。

1935年に時折訪れた平穏な日々から、私たちの置かれた状況で何が問題であったのかを理解できたはずであった。私たちが夫と息子と私の3人だけでネクストデイ・ヒルやノースヘイヴンの家にいられた時、その日々は俄かに穏やかになり、平常に戻るようであった。私の家庭は私自身の家庭になり、私たちの小さな息子がいるという喜びを真に味わうことができた。母への義理と夫への義理の間で葛藤に悩まされることもなかった。私は自分で決断を下し、仕事と人生に前向きになることができた。

ほとんど毎日日記を書くという習慣も幸いし、おそらくそのお陰で私は正気を保つことができた。誰にも言えない自分の気持ちを日記に書くことで、あたかも高い棚の上にきれいに積み上げてゆくかのように自分の気持ちを整理するのに役立った。日記の汚れのない白いページの上で文字になると、巨大なキノコはしなびえた。

落ち込みがちな内容を綴ったこれらの日記の多くの頁はずいぶん前に破棄した。その残りの中からもさらに頁を破棄したが、残った頁もあり、それらは本巻に収められている。そ

うしたのは、これらの日記も私たちの生涯の記録の一部であり、また多くの人々の生活の隠された部分の一部であるからである。日記には私の常軌を逸した感情の起伏が記されており、また日記はその年のクリスマスに私たちが急にイギリスへ発つことにした数多くの要因のひとつでもあった。私の精神的な憂鬱状態は、私たちの生活上のフラストレーションと対になっていた。最終的にある事件が起こったことによって、私たちはこの国では息子に正常な生活を与えてあげられないことを確信した。ある日、息子がエングルウッドの学校から自動車で帰宅中、新聞のカメラマンらに追いかけられ、自動車は道路の縁石に衝突してしまった。すると、そのうちのひとりが飛び出して来て恐れおののく息子の写真を撮ったのである。

1935年の様々な困難にもかかわらず、私の最初の著書で1931年の調査飛行について書き下ろした『翼よ、北に』の執筆を終えることができた。多くの点で『翼よ、北に』は抑えた記述である。その頁からはその冬に感じていたストレスを読み取ることもできないし、調査飛行でのストレスさえも差し障りのないように和らげてある。当時の私は、葛藤や弱さ、恐れ、一般的な生活の厳しい現状について書くことは無作法であると考えていた。それは私のためだけでなく、特にプライバシーを大切にしていた夫のためでもあった。そのため、今から見ると私の最初の本は、私たちの冒険を美化して描いたかのように思える。

私のように人生の一部を本の形に加工して出していると、次のような問いを投げかけることもできる。その本以外の形で自分の人生を明らかにする必要はあるのだろうか。日記の不完全な原材料に戻る必要があるのだろうか。飛行旅行のための細々とした準備、長時間の単調な作業、つらい朝の早起き、足が冷えきったり、埃だらけになった服を着たりしなければならぬ不快感、不合理な夜間恐怖、痲癩、憂鬱等を公表する必要などあるのだろうか。

60歳を過ぎれば、すべての人が直面する人生の浮き沈みについてよく理解できていると思うし、私はこの最後の機会に、美化することなく実際に何が起こったかということを理解して発表したいと思った。美化されていない実際に起こったことこそが人生であるように思う。私たちの人生の浮き沈みは必然であり、その浮き沈みによって人生を受け入れること

も受け入れないこともできるが、受け入れないことで失うものは大きすぎる。充実感、喜び、楽しみがある反面、悲しみ、試練、混乱も必ずある。私たちは矛盾や挫折などに直面しながらも、この「何処から何処へ」の旅の中で進むべき道を見出そうとする。これがあらゆる人の人生である。嵐の中、後部コックピットの中で恐れおののきながら反抗の気持ちを込めてもうこれ以上続けられないと決意しながらも、皮肉にもその晩に見知らない人からあなたは素晴らしい幸運な妻だと誉められてしまうのも人生である。また、1年間の歳月を無駄に過ごしてしまい何の目標も達成できなかったと感じながらも、毎日、私にとっては本を書くという作業を単にやみくもに続けることによって、実際には、やり始めた仕事を完成させているのも人生である。そのようにして人は人生の新たな扉が開いていたことに急に気づかされるのである。

けれども、1935年に私が日記をつけていた当時、私にそのような洞察力はなかったし、開かれた扉の向こうに何があるのかは知らなかった。

1974年 アン・モロウ・リンドバーグ Anne Morrow Lindbergh, U.S.A.

《三好企画のサイトに掲載されている文は全て著作権法により保護されます。この日本語訳の著作権は三好企画が保有しています。掲載されている文の閲覧と印刷には制限なく、研究にご利用ください。ただし、全文をコピーして流用すること、改ざんすることは断りします。論文の部分引用にあたっては、「出典」としてご掲載ください。》